櫛初見

是はむかし梅壺齋宮にて俗にいふものいみ伊勢へ下り給ひし時、別れの櫛とて、帝御てづから、齋宮の御頭へさし玉ひし、むかしの櫛のはしを木櫛を定式とすかきとりて、歌にそへ玉ひたる也、

〔源氏物語三十四若菜〕中宮よりも、御さうぞく、くしのはこ、心ことにてうぜさせ給て、○中略姫宮の御方にまいらすべくの給はせつれど、かゝることぞ中にありける、

さしながら昔を今につたふれば玉のをぐしぞ神さびにける、院御らんじつけて、あはれにおぼし出らるゝことどもありけり、あえ物けぢうはあらじと、ゆづりきこえ給へるほど、げにおもたゞしきかんざしなれば、御かへりもむかしの哀をばさし置て、

さしつぎにみる物にもがよろづ世をつげのをぐしのかみさぶるまで

○按ズルニ、此文亦櫛ヲ稱シテカンザシト云ヘルナリ、

〔古事記上〕於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黃泉國、○中略故刺左之御美豆良三字以音下效之、湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加禮斗呂呂岐氏、○中略八雷神成居、於是伊邪那岐命見畏而、逃還之時、其妹伊邪那美命言、令見辱吾、卽遣豫母都志許賣、此六字以音令追、爾伊邪那岐命取黑御鬘投棄乃生蒲子、是摭食之間逃行、猶追亦刺其右御美豆良之湯津津間櫛引闕而投棄乃生筍、是拔食之間逃行、

〔古事記傳五〕湯津石村、○中略師○賀茂眞淵說に、五百を約て由と云り、○註湯津桂、湯津爪櫛なども、枝の多く齒の繁きを云、

〔古事記傳九〕於湯津爪櫛取成其童女ハ、其童女袁湯津爪櫛爾取成と訓べし、湯津は、上湯津石村の下傳五の七十一葉に云るが如し、○註爪は借字加都麻の上を略けるなり、加都麻は堅津間にて、多都を切むれば、櫛の齒の左げくて間の堅くせまれるを云り、(中略)古の櫛は、爪の形ふたりとも、妻櫛の意なりともいふは誤なり、櫛は本都なり、串と同名なり、黃泉の段に火を燭し賜ふを思へば、上代の櫛の齒は、やゝ長かりしかば、串と同類